

第7回グラフィック「1_WALL」展

2012年8月20日(月)～9月13日(木)

公開最終審査

2012年8月30日(木) 6:00p.m.～9:20p.m.

サブカルチャー的な表現としてではなく、描いた人物の持つ魅力でグランプリに!

小さい頃から少女漫画に影響を受けてきた大門さん。展示では大胆にも直接壁へ描画することに挑戦。漫画から離れたヒロインたちが、この先どう展開していくのかに審査員の注目が集まりました。

受賞作 「ゲンガ」

少女漫画に憧れて、ヒロインたちを何度も真似して描いていました。ペンを持つと体に染み付いたかつてのヒロインたちがどうしても顔を出してきます。……かと言って彼女たちが一体どこの誰で、これから先どんな物語に進んでいくのか、というのは描いている本人でありながらサツパリ分かりません。彼女たちと向き合うために、まずは「ゲンガ」というタイトルをつけてあげることにしました。



審査員コメント

居山浩二

「何かしらこちらから投げかけたものがあつた方が、自分なりの精度を上げられるのかもしれない。好きだった漫画からの引用やフォーマットから、どれくらい距離を置くのかを、意識して高めることが出来たら、すごく良くなる。」

柿木原政広

「第一印象、迫力があつて良かった。場を与えられた時に、きちんと返す力を持っているクレーバーな人だと思う。そういう意味では今回の展示も返し方が出来ていると感じた。そして次に何が来るのかに期待する。」

都築潤

「あなどれない人。今までもあつたサブカルチャーからの引用という手法と、どれだけ差別化できるかが今後の問題。そうした戦略の芽えをぜひ見てみたいと素直に感じる。」

大塚いちお

「単純に壁に描いたからすごい、ということではない。二次審査から展示へ、良い意味で裏切られて新鮮だった。漫画に対してのコンプレックスが、作品にとって良い面もあり悪い面もあるが、良い面にかけてみたいと感じた。」

菊地敦己

「ビジョンがあり良い意味での戦略性も感じるが、感覚に頼りすぎている感がある。言葉に依り過ぎると広がり欠けてしまうので気をつけなければならないが、ある程度の言い切りは必要だと思う。」



大門光 Hikari Daimon

1987年生まれ。
東京芸術大学大学院映像研究科
メディア映像専攻修士2年在籍。



FINALISTS ※五十音順

大嶋奈都子
穴戸末林
大門光
たかくらかずき
中村ゆずこ
中垣ゆたか

JUDGES ※五十音順、敬称略

居山浩二(アートディレクター、グラフィックデザイナー)
大塚いちお(イラストレーター、アートディレクター)
柿木原政広(アートディレクター)
菊地敦己(アートディレクター)
都築潤(イラストレーター、インタラクティブディレクター)

■ 出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略



穴戸 未林 Mirin Shishido
「シャツ」



福島県で生まれ育った。今回展示しているのは光や風などの自然現象、小さい頃の記憶、尊敬する人から受けたインスピレーションをもとに生まれた作品。個展プランとしては大きな作品を、身体を使って描きたい。最近づくり始めた映像作品をプロジェクターで投影してみたい。

〈質疑応答〉

- 大塚：タペストリーに直接描いて吊り下げ、左右対称に配置した展示の狙いは？
- 穴戸：いくつか持ってきて、会場を見て展示を考えた。対照を意識したわけではない。
- 柿木原：絵も展示も繊細だし、展示に使っている石や紐にもこだわりがあるの？
- 穴戸：石と紐と布は自分のイメージに合う物を選んでる。台は意識しなかった。



大嶋 奈都子 Natsuko Oshima
「TOKYO SALARYMAN STAMP」



黒いスーツに革靴、猫背、携帯電話……同じように見えるが一人一人クセや個性が違う。そんなサラリーマンの姿に魅かれ、サラリーマンスタンプを作っている。新橋など67駅でサラリーマンをデジカメで記録し、396人の姿を描いた。このスタンプでサラリーマンのイラストを描き、スタンプも展示した。

〈質疑応答〉

- 眉山：今回、スタンプを押してサラリーマンのモチーフを描いたのはどんな意図？
- 大嶋：遠くから見ても近付いてもサラリーマンになっていると面白いと思った。
- 都築：あなたは本当にサラリーマンに興味があるの？
- 大嶋：最初はサラリーマンというより、東京に人が多いところに興味を持った。



大門 光 Hikari Daimon
「ゲンガ」



小さい頃から少女漫画「なかよし」を愛読していた。そこに連載されていた、キラキラ眩しいヒロインたちを何度も何度も真似て描いた。ペンを持つと体に染み付いたかつてのヒロインたちがどうしても顔を出す。今回はこのヒロインたちを壁一面に大きく描いて、漫画とはちがった物語を与えたいと思った。

〈質疑応答〉

- 菊地：壁にはプロジェクターなどを使って小さい絵を拡大してなぞって描いたの？
- 大門：投影はせずに、その場でB2とB3の鉛筆を使って直接描いた。
- 大塚：実際に壁に描いた印象は？
- 大門：最初は不安だったが、描いてみたら気持ちよかった。「やってやった！」と思った。
- 菅沼：「ゲンガ」というタイトルの意味は？
- 大門：この女の子の絵が自分の原点だと思っているので「ゲンガ」とつけた。



中村 ゆずこ Yuzuko Nakamura
「静かな世界」



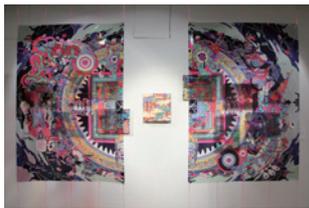
実家で絵を描いているので、絵と向き合う時間はたくさんある。展示した赤い絵はてんとう虫が集まってきている様子。青い絵はふわふわと何かが漂っている感じ。絵の中の白い部分は、圧迫感がないようにキャンバス地を残している。個展では、日々思うことや感情を作品にして空間づくりしたい。

〈質疑応答〉

- 柿木原：赤と青の色は、何か意図があるの？
- 中村：あまり考えていない。その時の直感で描いている。
- 菊地：ポートフォリオの中の2点をそのまま展示しているが新しく描いたものはないの？
- 中村：新しい作品も描いたが、スペースの中でこの2点がバランスよく展示できたので。



たかくら かずき Kazuki Takakura
「【バグ】ザ・ワールド」



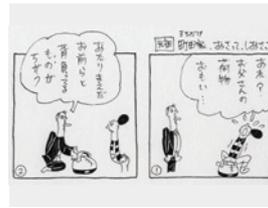
二次審査までは「映像を物質化する」というテーマで作品をつくってきた。しかし新宿や渋谷など東京を歩いていて「東京もバグっている」と思えたため、「東京」をテーマにした作品を数点描いて今回の展示に追加した。個展ではデータを祀る神殿をつくりたい。さらに3DCGもつくりたい。

〈質疑応答〉

- 菊地：フィルムの展示と壁に掛かっているパネルの関係性は？
- たかくら：テレビのフレームの中の映像を見ているような感覚を出したいと思った。
- 眉山：「バグ」と「データを祀る」ということの関係性は？
- たかくら：それはまったく別のこと。物質ではないデータを神様みたいに祀り上げたい。



中垣 ゆたか Yutaka Nakagaki
「4コマ漫画『町田家、あさって、しあさって。』」



「町田家、あさって、しあさって。」という4コマ漫画を2005年よりブログで毎日更新している。今日で1927話になった。そのうちの418話を使い、圧倒的な展示にしたいと思った。個展では、会場の壁の下から上までびっしり4コマ漫画で埋め尽くし、毎日1話ずつリアルタイムで作品を増やしたい。

〈質疑応答〉

- 大塚：双眼鏡もいっしょに展示している意図は？
- 中垣：上の方が見えにくかったので、展示当日におもちゃを買ってきて展示した。
- 都築：バツと見、壁紙のように思える。よく見ると貼り方がわりと雑だったの？
- 中垣：壁全面に圧倒的に貼ったら面白いと思った。一作一作大きさが違うので揃わない。

■審査員の感想

ここからは菅沼さんが進行して、ファイナリスト一人ひとりについての感想を各審査員に聞いた。まずは●**穴戸さん**の作品について。大塚さん：「一次、二次審査では穴戸さんが一番だった。しかし今日の展示を見て、こだわっている部分への意味の持たせ方が弱いと思った」。都築さん：「絵がうまい人。ナチュラルなのもいい。使いたい場所が想像できる。反面、意外性がない」。柿木原さん：「好きなモノがはっきりしていて、センスの良さを感じる。その一方、なりゆきまかせの部分もあり、もう一歩踏み出せていない」。居山さん：「クリアで魅力的な絵だが、その良さが展示で表現できていないのがもったいない」。菊地さん：「絵のセンスもグラフィックのセンスもある。展開するものに合わせるセンスもあり、コンペに囚われずに伸び伸びやれば良いと思う」。続いて●**大門さん**の作品について。大塚さん：「単純に壁に描いたから凄いわけではなく、あのタッチの絵が額縁に入ってくるのを想定していたのを良い意味で裏切ってくれた。新鮮だった」。菊地さん：「明快なビジョンがあって、すごく戦略的な人だと思う。しかし言葉にできず作品との整合性がとれていないのでは」。都築さん：「菊地さんと同じ印象を抱いた。あなどれない人。その戦略の芽えを見てみたいと素直に感じさせる」。柿木原さん：「場を与えた時に的確に返すクレーパースを持っている感じがする。今回の展示にもその返し方が出ている」。居山さん：「こちらから何かしらテーマを投げかけた方が精度が上がるかもしれない」。●**たかくらさん**の作品について。大塚さん：「何かやってくれそうな期待はあったが……良い意味で解釈すれば、“バグ”を作品にしようとしている努力は見える」。柿木原さん：「“バグ”を表現するのって、難しいコンセプト。この人をお願いすると何か面白いのができる、という次元まで高めないと厳しい」。都築さん：「神殿を作ると言っているが、今回の展示はそれにつながるようなものではなかった」。菊地さん：「一次審査では迷いなく○をつけた。だが、自分の作品を少し手垢が付いたイメージに解釈し過ぎ」。居山さん：「考えは、なるほどと思える部分もある。ただ、それが先行しないようにアウトプットの表現を定着させることが大切」。●**大嶋さん**の作品について。都築さん：「物量や単純な仕事の積み重ねが気持ちいい。サラリーマンというテーマから離れても、よかった」。柿木原さん：「真面目に考えられて、問題解決できるタイプ。デザイナーとして雇いたい人。一個人としての可能性はあると思う」。居山さん：「サラリーマンを



あれだけの数集めてスタンプにするプロセスは文句なくスゴイ。しかし、サラリーマンに固執しないほうがよかった」。大塚さん：「自分が何を作ろうとしているかのイメージが見えるのもっと良くなる。作業量はかなりのポテンシャルを持っている」。菊地さん：「この人はスタンプ以外の作品で何を作るんだろうと思った。この作品はもう完結している」。●**中村さん**の作品について。柿木原さん：「自分が思ったことをしっかり定着させる姿勢がいい。言っていることも解し、後押ししたくなるようなプレゼンテーションだった。実物の絵も良かった」。大塚さん：「作品は良いが判断に迷っている。今後の展示について具体的な何かを提示しているわけではないので判断に迷う」。都築さん：「絵画的な作品。絵のセンスは感じる。だからこそ、グラフィックというコンペでは目立っている。それをどう評価するか」。菊地さん：「この作品は絵画として見ている。長いスパンで美術の世界で活動して欲しい」。居山さん：「絵は素晴らしい。単純に次の作品が見てみたい」。最後に●**中垣さん**の作品について。大塚さん：「完成された4コマ漫画としての質、量が揃っている。もうすでに完成されている作品だと思う」。居山さん：「WEBで毎日更新することで完成されている作品。それを展示する時に、ただ壁を埋めれば良いというものでもない」。菊地さん：「右から左へ横書きの4コマ漫画って今まで見たことなかった。それが現代的でオシャレに見える。展示そのものは重要ではないのでは」。都築さん：「そう言われてみれば、横のつながりと縦のつながりや、隙間のなさとかが普通じゃないかも」。柿木原さん：「これだけの量を描いていくと、この表現自体が中垣さん自身になっていく。絵の中にある魅力がこの人の魅力だと思う」。



■審査員による投票

一人ひとりに対する感想を聞いた後、各審査員が投票前の心境を語った。大塚さんは「いろいろな基準があるので、見方によっては誰にもチャンスがある。まだちょっと迷っている」。菊地さんは「まず前提として、このファイナリスト6人は作品の質が優れているから選ばれている。グラフィックの展覧会ということを念頭に選びたい。だが、突出した人がいないので難しい」。都築さんは「スイッチを押せば突き抜けるような人を選びたい」。柿木原さんは「これまでの『1_WALL』では何か得体の知れない面白さを持つ作品がグランプリになっている印象がある」。居山さんは「審査のプロセスも含めて『1_WALL』ならではのグランプリを決めたいが、この6名の中から選ぶのはまだ迷っている」と、発言があり、各審査員にグランプリ候補を2名選んでもらった。(都築さんは1名のみ)結果は……

居山 / 大門 中村
大塚 / 穴戸 大門
柿木原 / 大門 中村
菊地 / 大門 大嶋
都築 / 中垣

これを集計すると、大門4票 / 中村2票 / 穴戸1票 / 大嶋1票 / 中垣1票



この結果を受けて、菅沼さんが「一人だけ大門さんに投票していない都築さん、いかがですか？」と意見を聞くと、「大門さんも良いと思っている。ただ、大門さんの作品＝使い古されたポップアートの手法を越えられるのか」と都築さん。それに対して大塚さんは「どう思われるかは本人次第としか言えない」。菊地さんは「漫画風とはいえ、描かれた人物が魅力的。決してタッチの面白さだけで選んでいるのではない」と回答。これに都築さんも同調して、審査員全員が大門さんを選出することに異論がなくなった。「第7回グラフィック『1_WALL』グランプリは、大門光さんに決定！」と菅沼さんが高らかに宣言して公開審査会は閉幕した。

■出品者インタビュー

穴戸未林さん
グランプリを獲得して個展をやったので残念です。どんな基準で選ばれるのか、よくわからなかった。今後は絵をたくさん描いて発表して、多くの人に見てもらいたいですね。

大門 光さん
グランプリを獲得つもりで来たけど、結果が出てみるとびっくり！これで良いのかという気持ちもあるが、「やってやったぜ！」という気持ちもあります。今日の審査でまた課題が見つかったけど、それを乗り越えて、またみんなを良い意味で裏切るような一年、その先にしたいです。もっとグレードアップできるように「やってやるぜ！」。

たかくらかずきさん
展示したりプレゼンテーションしたりして、自分の作品を客観的に見ることができてよかったです。他の作者と作品を間近で見ることができたのも収穫でした。

大嶋奈都子さん
展示が思い通りにできず悔しい。その結果、グランプリを目指して準備してきたので悔しい。アドバイスいただいたように、もっと自由に作品をつくってみたいと思います。

中村ゆづこさん
公開審査で審査員の方の貴重な意見を、間近で聞くことができて勉強になりました。言われたことはすべてポジティブに受け止めたいです。またゆづくりと自分の絵を描いていきます。

中垣ゆたかさん
長かったです。とにかく公開審査の間中、時間が長く感じられました。今日は展示もプレゼンテーションも、ほぼ想定通りできました。ありがとうございます。

<文中一部敬称略 取材・文 / 田尻英二>